

大平仁一さんへの追悼エッセイ

長野県植物研究会誌のエッセイスト、大平仁一さんが昨年 2015 年 10 月 26 日亡くなった。77 歳であった。モミジのきれいな頃、飯山の自宅の机に座り、植物図鑑を開いたままの大往生であったと聞いた。永く観光案内や自動車修理販売などで活躍したが、60 歳で脳梗塞を患いリハビリ生活に入ったという。そのリハビリのひとつが 1995 年の植物研究会入会であったと聞く。北竜湖周辺の植物写真撮影を日課として、植物研究会の例会を休まずに参加された（10 回?）。植物研究会参加への楽しみこそがリハビリに役立ったとの言葉が印象的である。しかし 65 歳に脳梗塞が再発し、車椅子と筆談の生活が 12 年続いたようである。その間も同会員である奥様は介護 NPO 活動に励まれ、仁一さんも車椅子で自活努力をし、写真撮影を継続されたようである。研究会誌に遺された多くのエッセイは、不自由な生活のなかで野生植物と語らった記録であろう。印象的な出会いであったが、例会でお会いできた日々はわずか 6-7 年である。そのあとの 12 年半の暮らしは、研究会誌へのエッセイに垣間見ることができる。

1996 年に信州へ赴任した私は 1997 年から植物研究会に入会した。すでに大平さんは例会の常連で

あり、菅原先生の庶務・会計作業を手伝うようになってから大平さんからの電話を何回か受けた記憶がある。大平様ご夫妻には 3 つの印象的な思い出がある。

- (1) おいしい飯山のアスパラが贈られてきたこと
- (2) 大平さんご夫妻が中心となって準備された北信例会において、栄村五宝木での盛大な夕食と山田さん宅での豪華な昼食を頂いたこと、そして (3) 美人の奥様（大平さんはお母ちゃんと呼ばれていた）作成のおいしい漬物と、ナイフで切り取った生ウドを薦めてくれたことである。

もうすぐ長野県植物研究会が 50 周年を迎える。個人的には散漫な作業に追われつつ図鑑検索もおろそかな日々、仁一さんがひっそりと野外植物観察や植物図鑑検索を命がけで続けておられたと思うと後ろめたく感慨深い。病をかかえつつ植物研究会へのエッセイ報告や野外植物記録を生きがいだったとすると、長野県植物研究会のさらなる継続発展の大きな意義を大平仁一が教えてくれたとおもう。

奥様（ユリさま）と井田編集委員長からの伝言をもとにアレンジしました。

（佐藤利幸 庶務 2016.04.17 64 歳）



シラネアオイ 植物研究会誌 46 号 大平仁一さん原稿より